

---

# とある夜のお話し

ドカン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある夜のお話し

### 【Nコード】

N4855I

### 【作者名】

ドカン

### 【あらすじ】

三国同盟後の蜀のお話しです

月が夜の闇を照らすある晩。悪夢により北郷一刀は目を覚ました。自分の体を見るとあちこち冷や汗が流れている。それに、声を出したのだろうか。蜀の武将達が何事かと部屋に集まっていた。

「ご主人様、どうしたの？大丈夫？」

もう一人の蜀の皇帝劉備こと桃香が聞いてきた。

「ああ、なんとか大丈夫だ。みんな部屋に戻ってくれ。ごめんな、心配かけて」

なんとかみんなに心配をかけまいとムリヤリ笑顔をつくった。だが…

「いえ、このまま部屋に戻るわけにはいきません」

五虎将が一人、関羽こと愛紗が真っ向から反対してきた。

「今のご主人様のお顔を見る限り、とても大丈夫とは思えません。やはり、誰か一人付いての方が…」

「いや、ホントに大丈夫だから。今日はみんな部屋に戻って…」

「いえ、やはり誰がいなくて。もう少し我々の言うことをきいてください。だいたい…」

「ああ、また始まった」

愛紗に説教をくらいながら一刀は一人思った。彼女には少々頑固な

ところがあつた。これと決めたら気持ちを揺るがしたりはしない。それは武将や人としては素晴らしいことだと思つ。だが、もう少し柔軟性があつてもと一刀は日頃常々思つていた。

「ですから……つて聞いてますかご主人様」

「はい、聞いております」

いつまで続くのだと思つていと桔梗が助け舟を出してくれた。

「愛紗よ、もうそろそろよいのではないか。既に夜は遅い。あまり起きてると明日に響くぞ」

桔梗ありがとうと心の中で一刀は感涙の涙を流していた。

「それもそうだな」

「それにお館様が大丈夫と申すなら大丈夫であろう。そう心配するでない」

「だが……」

まだ食い下がる愛紗。

「愛紗、ホントに俺は大丈夫だから」

念を押して言った。すると愛紗も納得したようであつた。

「わかりました。では失礼します。おやすみなさいませ」

「うん。おやすみ」

おやすみと言つと愛紗を筆頭に皆部屋まで戻つていった。が…

「さて、主。どのような夢に悩まされておられるのです?」

その場に星、桔梗、紫苑が残った。

「なんだ三人とも。部屋に戻らないのか?」

「ええ。ご主人様が心配ですから」と紫苑が言う。

「愛紗達には戻れとか言っておいて自分はここに残るのか?」

「まあなんとでも言ってくだされ。だいたい今日だけではありませんせぬ。ここ最近のお館様はどこか危ない。寝ておられないのではないか」

桔梗の鋭い指摘に口を閉ざす一刀。実際最近彼はよく眠れてはいなかった。

「どうしてそう思うんだ? 政務を疎かにしたわけじゃないし、いつもと変わらないと思うけど」

あくまで自分は大丈夫と言い張る一刀。彼女達に弱みを見せたくない彼の虚勢であった。「ええ確かに。私達もはつきりとはわかりません。ですが、私達の勤が働くのです。主にいつもと同じ元気がないと」星が真面目な顔をして言った。

軍議や戦、メンマ以外のことで彼女がこんな真剣な顔をしてるのを一刀は久しぶりに見た。

「もうこれ以上黙っているのはよそう」真剣な彼女の顔を見て一刀は話すことを決意した。

「最近さ、夢の中に死んだヤツらが出てくるんだ」

一刀は語り始めた。「そいつらみんな戦とかで死んでいったヤツらだと思うんだ。多分」

「多分、とはどういうことですか？」

話を聞いていた紫苑がきいた。

「俺そいつらと話したことないんだ。てか、会ってすらいない」「  
では、何故主は彼らが戦で死んだ者たちとお分かりになるのです？」

「わからない。でも、間違いない。俺の夢に出てくるヤツらは戦で死んでいったヤツらだ」

夢に出てきたことをそのまま彼女らに喋っていた。

「それでさ、そいつら俺のことじっと見てるんだ。ずっと。そうすると、なんだか段々気分が悪くなって目が覚めるんだ。今日みたい  
に」

「彼らはお館様を見つめてるだけなのですか？」

「うん。ただじっと見てるだけ。後は何もしない」

「ふむ、なるほど。そのようなことでしたか」話を聞き終えた星が言う。そして、今度は彼女が一刀に対して話し始めた。

「主よ、我が手は主にはどう映りますかな？」  
「どう映るって…星の手は白くて細長い綺麗な手じゃないのか？」  
「ふふっ、ありがとうございます主。ですが、今はそのようなことは聞いておりませぬ」  
「じゃあ、いったいなんだって言うんだよ？俺にはわからないよ」  
「主よ、見えませぬか？我が手が赤く血塗られているのが」  
「血塗られているって…別に普通の手じゃないか」

「一刀の言っていることは正しかった。実際彼女の手は普通であり、ましてや血になど染まってははいない。」

「確かに私の手は普通に見えるでしょう。ですが、この手は見えない血に染まっているのです」

「見えない血って何のことだ？」

「主は私や紫苑、桔梗が戦に出て戦ったことは知ってますな？」

「ああ、もちろん知ってる。俺自身がいたわけだしね」

「そして正確に言えば、この武官は皆戦に出て戦っている」

「ああ、そうだね」

「つまり皆誰かを殺めているのです」

その言葉を聞いて一瞬一刀はやな感じがした。

「自分が愛する人達は誰かを殺めている」

それは一刀にとってあまり触れたくないことであった。

「けど、それはしょうがないことじゃないか。戦なんだ。やらなきゃやられる。そういうもんだら戦って」

「ええ確かに。戦とはそのようなものです。ですがな主、我々が背

負わなければ死んでいった者達の魂は一体どうなってしまうのでしょうか。彼らを殺めた我々は彼らの魂や思いを背負わなければならぬ。例え皆が忘れてしまったとしても、私だけは彼らを覚えていなければいけないのです」

そんなことを考えたこともなかった。ただ、生き延びればいい。いい政治をすればいいとばかり思っていた。

「ご主人様、よい政治を行う。生き延びると言うのは当たり前なのです。よい政治を行うのは義務であり贖罪にはならないのです」

母のような口調でありながら紫苑の言葉は厳しかった。穏やかで、そして力強さを一刀は感じとっていた。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」

口にした言葉だった。よい政治をする以外にできることって何なんだ？それ以外にいったい何があるって言うんだ？数々の疑問が頭に浮かんだ。答えが欲しかった。それだけだった。

「お館様よ、儂らにできることなど何一つないのです。なぜなら、償うべき相手は既にこの世にいないのですからな」

「あ…」

言われて初めて気づいた。彼らは既にいない。誰に対して罪を償うというのであろうか。死んでいった者達の家族か？恋人か？いったい何を償うと言うのだろうか。

「主、我々は何も償えません。ただ、彼らを殺めたという事実を生背負っていくだけ。そして、我々が背負うということは主も共にその事実を背負うということ」

星達は一刀、桃香の名の下で戦ってきた。それが意味すること、それは星達は一刀達の手足となり戦ったということである。星達が背負うのであれば一刀達も背負う。至極当然のことであった。

「立場あるものというのはそれだけの覚悟がなければなりません。すべてを背負うという覚悟が。そして、ご主人様はご自分でその道をお選びになったのです」

あの時、初めて桃香達と出会った時。一刀は選んだ。彼女達の王となることを。あの時それは、拒否をすれば拒否できるものだった。それでも、この道を彼は選んだのだ。もうこの道からは逃げられない。この世界にいる限り彼は王という立場からは逃げられない。

「王様って大変だな…」

「何を言っておられますか。ずっと王でおられたではありませんか」

「や、そうなんだけどさ。なんか改めて思い知ったよ」

自分の立場。それは、幾千という人の犠牲で成り立っているのだった。

「でもお館様、貴方は一人ではありません。貴方のために命を懸ける者達が、ここにいますから」

「左様。主が背負うことに疲れたのであれば、全力で我々は支えま  
す。何があるうと貴方一人に背負わせたりはしません」

「ですからご主人様、ご自身の夢に出てくる彼らのことも背負って  
あげてください。彼らのことを忘れないであげてください」

「一刀に言葉はなかった。ただ、その瞳には確かな決意があった。一  
すべてを背負い生きていく―それは王となった者への、宿命なのか  
もしれない。」

夜空が綺麗な晩だった。その日、一人の名君が誕生した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4855i/>

---

とある夜のお話し

2010年10月17日04時31分発行